

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第5章「命」

3月15日早朝、福島第一原発には小雨が降っていた。男性サインズの黄色いかっぱを羽織った総務班副班長小薬敏子(55)は医療班長の福澤淳(43)とともに免震重要棟前の駐車場

で、退避する社員たちを約150メートル離れた路上に止まっているバスに誘導していた。

小薬が協力企業から借りたバスは6台だが、5台が満員になった後、バスに向かう社員はなくなった。

免震棟から出た社員の多くは自家用車に数人ずつ乗り込んで出発したのだ。余ったバス1台と、東京電力所有の別の中型バス1台は免震棟の前に置いていくことになった。

正門前は高線量



震災対策本部で記者会見する東京電力の担当者
＝2011年3月15日夜、福島市

待機不可能と判断

(引)が乗っていた。バスはもう5分以上、止まったままだった。だが時には既にバスの準備に向かって「何の説明もなくて、いったい、最終的な退避先がどこか知らなかつたのだ。」
「何の説明もなくて、いったい、最終的な退避先がどこか知らなかつたのだ。」
「何の説明もなくて、いったい、最終的な退避先がどこか知らなかつたのだ。」

午前6時59分、総務班長が緊急時

対策本部で所長の吉田昌郎(56)に呼び寄って言った。「駐車場にバスを2台、残してあります」。総務班長は2台分の鍵を手渡した。

「あ、分かった」。吉田は硬い表情で受け取った。2台のバスは最後の脱出手段になるはずだった。

低い場所などなかった。正門付近では午前7時2分に毎時8.2ミリシーベルトを計測していた。車内には全面マスク装着していない社員もいる。この場

面は「2台(第2原発)に向かいまして、第1原発に連絡する」と、吉田は「お、そうか」と、安堵した声で答えた。

総務班長は小薬とバスの運転手に指示した。小薬と運転手たちは総務班に復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓

5台のバスは正門カーブをくぐり、先のカーブで待っていた。うち1台は復旧班の電気設備担当職員拓